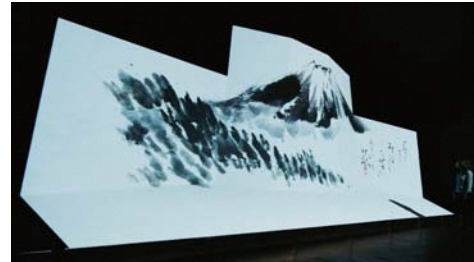


葦山反射炉の音と今をつなぐ 葦山反射炉ガイダンスセンター

Nirayama Reverberatory Furnaces



外観

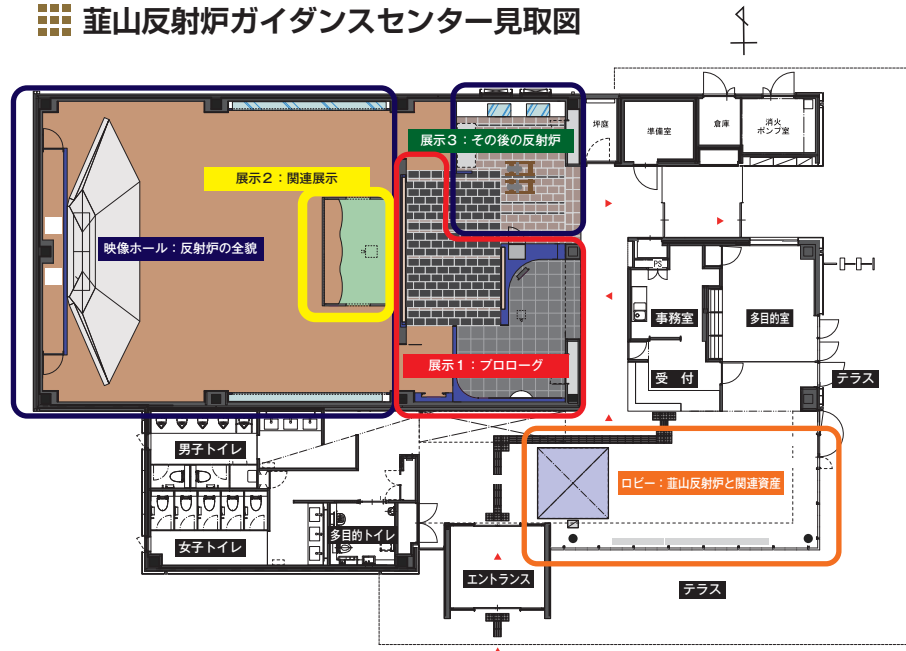


展示映像の一例

葦山反射炉の築造に至る時代背景や経過から、稼働当時の状況、そして現在に至るまでの保存の取組などについて、建築空間を活かした迫力ある映像演出や最新の調査研究成果を反映した展示などにより発信する。

見学者は、まず葦山反射炉見学の導入部であるこのセンターで、歴史や価値、さらには日本の近代化に果たした役割などの理解を深める。その後現地に進み、反射炉本体や周囲の敷地、さらに河川からなる「葦山反射炉」を体感する。

葦山反射炉ガイダンスセンター見取図



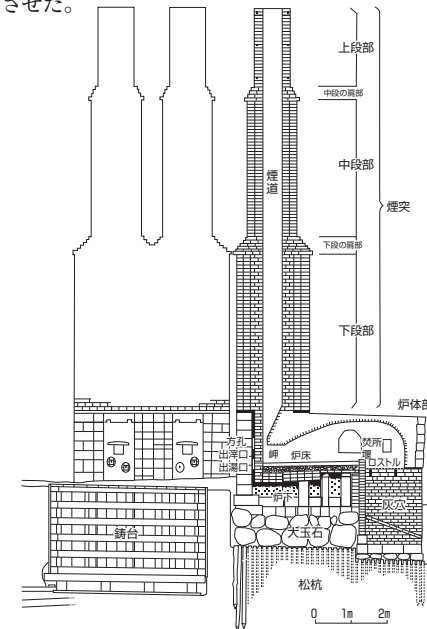
築造の経過

反射炉は、当初伊豆下田港に近い賀茂郡本郷村(現下田市)で着工し、基礎工事などが行われていた。しかし、安政元年(1854)3月、下田に入港していたペリー艦隊の水兵が敷地内に侵入する事件が起きたため、急きょ葦山の地に建設地を変更することとなった。

下田での建設のために用意されていた煉瓦や石材は葦山に運ばれ、改めて利用された。

また、千数百度という高温に耐える良質の耐火煉瓦は、賀茂郡梨本村(現河津町)で生産されていた。

葦山での反射炉建設は順調には進まず、江川英龍は、その完成を見ることなく安政2年(1855)に世を去っている。跡を継いだ息子の英敏が建設を進め、安政4年(1857)、連双2基4炉の反射炉本体とその周辺の関連施設からなる葦山反射炉を完成させた。



反射炉本体(操業当時の)断面構造

| 葦山反射炉の歴史 | |
|-------------|---|
| 年代 | 出来事 |
| 安政元年(1854) | 6月 田方郡中村(現在地)において起工 |
| | 間7月 耐火煉瓦積み開始 |
| | 11月 4日 安政の大地震 反射炉には別条なし |
| 安政2年(1855) | 1月 16日 江川英龍、江戸屋敷にて死去 |
| | 8月 幕府を通じて佐賀藩の協力を要請 |
| | 12月 佐賀藩、協力を了承 |
| 安政3年(1856) | 4月 11日 タール製作小屋できる |
| 安政4年(1857) | 2月 5日 佐賀藩より杉谷雅助・田代孫三郎ら、技師および職人到着 |
| | 7月 1日 南炉試鑄 |
| | 9月 9日 1番18ポンドカノン砲鑄込み |
| | 11月 葦山反射炉連双2基竣工 |
| | 12月 4日 1番18ポンドカノン砲鑄開始 |
| | 12月 6日 2番18ポンドカノン砲鑄込み |
| 安政5年(1858) | 1月 8日 1番18ポンドカノン砲鑄開終了 |
| | 2月 22日 3番18ポンドカノン砲鑄込み |
| | 3月 9日 杉谷雅助帰国 |
| | 3月 13日 1番18ポンドカノン砲試射成功 |
| | 3月 22日 田代孫三郎および佐賀藩職人帰国 |
| | 3番18ポンドカノン砲鑄開終了 |
| | 3番18ポンドカノン砲試射成功 |
| | 4月 22日 3番18ポンドカノン砲試射成功 |
| 万延元年(1860) | 4月～5月 南部産銃鉄製18ポンドカノン砲1門鑄造、試射成功 |
| 慶応2年(1866) | 4月 幕府直営から江川家私営となる |
| 明治元年(1868) | 明治維新 |
| 明治5年(1872) | 10月 陸軍省による現地調査実施 |
| 明治6年(1873) | 3月 陸軍省に移管、設備・附属品等を造兵司令に引き渡し決定 |
| 明治41年(1908) | 陸軍省による補修工事実施 |
| 大正11年(1922) | 3月 8日 史跡指定 内務省に移管 |
| 昭和32年(1957) | 葦山村(当時)による保存修理実施 |
| 昭和60年(1985) | 葦山町(当時)による保存修理実施 |
| 平成元年(1989) | |
| 平成19年(2007) | 11月 30日 経済産業省により「近代化産業遺産」に認定 |
| 平成23年(2011) | 6月 6日 「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産候補に追加 |
| 平成25年(2013) | 9月 20日 国が「明治日本の産業革命遺産」をユネスコ世界遺産センターへの推薦資産に決定 |
| 平成26年(2014) | 1月 29日 国がユネスコ世界遺産センターに推薦書提出 |
| | 9月 26日 イコモス(国際記念物遺跡会議)による現地調査実施 |
| 平成27年(2015) | 7月 8日 第39回ユネスコ世界遺産委員会において「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として世界遺産に登録 |